



雑感：パンデミックと教育・研究

本稿の執筆依頼を引き受けたのは今年の年明けすぐのことであった。その頃は、ウイルス感染が世界中でこれほどの猛威を振るい、深刻な事態を引き起こそうとは、もちろん夢にも思わなかった。しかし、この間社会状況が急速に目まぐるしく変化し、これからどうなるのか誰にも分からない、まさに一寸先は闇の状態である。本稿を執筆している現在、全国に非常事態宣言が出された直後であり、本著者が勤める大学も原則立入禁止中なので職場での研究や講義はストップした状態である。動植物や細胞等を扱う研究あるいは定期的なメンテナンスを要する装置を使う研究を行っている場合には、その維持管理のために時折教員がラボに出向く程度であり、大学のキャンパスはさながらゴーストタウンの様相である。必然的に在宅ワークが主となり、家族と過ごす時間が急に増え、普段はほとんど見ないテレビ番組も目にするようになった。ワイドショーは当然のように新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）に纏わる政治・経済問題をエンタテイメント的に取り上げ、これでもかと不安を煽り立てているので、すぐに辟易して見るのを止めた。一方、「情熱大陸」では、2週に渡りSARS-CoV-2対策に関わる方達を取り上げていたのでこれは興味深く拝見した。東京大学医科学研究所の河岡義裕教授と聖路加国際病院で院内感染対策を担当されている坂本史衣氏に密着したドキュメンタリーであった。独特の演出はあるものの、現在進行系で感染が拡大している最中での取材に基づくものであったので、現場の切迫した雰囲気や課題などが垣間見れたとともに、今この瞬間も最前線の現場での医療

や感染対策に多大なご尽力をしておられる方々には心より頭の下がる思いでいっぱいになった。河岡先生と坂本氏が偶然にも共通して口にしておられた「やるべきことを淡々とこなす」というのがとても印象に残った。これに比べると幾分呑気な話のようではあるが、著者の身の回りの「やるべきこと」に目を向けると、大学に身を置く立場としては、やはり学生の教育そして研究をどうするかという重要な問題がある。この先どうなるか分からないが、現時点までのところ日本は、SARS-CoV-2感染者ならびにこれによる死亡者が欧米に比べるとゆっくりとじわじわ増加しており、複数の科学者・専門家が、場合によっては収束まで数年単位の時間がかかると予測している。一旦ある程度の収束を迎えたとしても、再度の感染拡大を防ぐために社会生活のあり方を大きく変えることが要求されるだろう。web講義を導入したものの、サーバーに負荷がかかり過ぎてダウンしてしまうという問題がある。百歩譲って講義はオンラインで可能だとして、実技を伴う実験や実習科目についてはどうすればよいのか？ ラボでの卒業研究や修士過程、博士課程の研究をいつまで制限すべきなのか？ 学生やその他の構成員の安全はどのように担保可能か？ そしてこのような状況下での成績評価、単位認定、学位認定は？ 次年度入学の入試は実施可能なのか？ 現時点で未解決の問題には枚挙にいとまがない。大学に対して休講期間中の一部授業料返還の署名活動や訴えも起きていると聞く。マスコミやネット上の記事も何かと批判的なものが多く、皆ストレスに晒されているようだ。残念ながら、著者にはこれらについて明確な私案・提言を今すぐできるような力量がないが、できるだけ冷静になり、建設的かつやや長期的な展望をもちつつ諸課題に取り組むことが大事ではないかと思っている。本稿が皆様の目に留まる頃には世の中の情勢が好転していることを願いつつ、筆を擱くことにする。

(いそがばまわれ)